関　弥生さんと私

高辻　玲子

「二階の欄干で、雪の降るのを見て居ると、自分のからだが、二階と一緒に、段々空中へ上がって行くような気がする」と、今年十二になる女の子がいふ。かういふ子供の頭の中には、屹度大人の知らない詩世界があるだらうと思ふ。併し、かういふ種類の子供には、何處か病弱なところがあるのではないかといふ気がする。（大正 13 年 8 月　渋柿）

写真：関弥生さん（左）と筆者
（弥生さんがお召しになっているお洋服は、ご自分でミシンを踏んでお作りになったものです）

弥生がどう思ったか､「おとうさんはことしじゅう、学校を休んで来年からいらっしゃいね」と言った。だれかのいうのを聞いてだろう。
（大正 9 年 1 月 15 日の日記）

鈴木三重吉君に「赤い鳥」の童謡をほめてやったら、今日童謡集第一集をよこしてくれた。弥生がドーシテもらったかと聞くから、謡をほめてやったらくれたのだと言ったら、「ほめると得だネー」と言ったので大いに笑った。　（大正 9 年 2 月 7 日の日記）

寅彦全集の中にこのように時折登場する寅彦の次女・関弥生さんとの出会いは、私にとってまさしく「天からの贈り物」、偶然と言おうか必然と言おうか、私の夫の祖父が遺した留学日記の中に若き日の寺田先生のことが書かれていたことが機縁となって、予期せずして親しいお付き合いが始まったのだった。人生のあの時期、それは弥生さんにとっては最晩年の１０年間であり、私にとっては老年期に達する直前の１０年間だった。

弥生さんは当時現存する寅彦の唯一人の遺児であり、ある意味で誰よりも熱心で優秀な寅彦研究家だった。ただし、７０代の終わり頃に、級友を見舞った病院の玄関で転倒して歩行がご不自由になり､その後軽い脳梗塞もなさって､私が初めてお目にかかったときは、外出もままならぬ状態だった。そこで自然と私は弥生さんの、言うなれば研究助手、私設秘書、お客様のご案内係といった役をおおせつかり、そのおかげで活字からだけでは感じられない、あるいは活字になっていない寅彦先生の人間像を知ることが出来て、すっかり寅彦ファンになってしまった。

寅彦先生に心惹かれた理由の一つは、私自身の祖父が寅彦先生と同世代なので、父からよく聞かされていた「明治の父親像」を寅彦先生に感じたことである。けれども、この頃になって私は、寅彦先生から学んだことと同じくらいに、弥生さんご自身の人生から多くのことを学ばせていただいたと思っている。

私の母と弥生さんは、どちらも明治の終わりに生まれ、大正、昭和、平成を生きた同世代の女性だった。母は弥生さんよりも長生きしたけれど、最晩年の１０年はほとんど眠った状態だった。弥生さんは深く同情してくださり、「お母様とお話ができないのはさびしいでしょう。私が少しでもその分あなたのお相手になれるといいのですけれど」と言ってくださった。その反対に、「あなたは女のごきょうだいがいらしてうらやましい」とも言われた。若くして亡くなった妹の雪子さんを思ってのことだった。「雪子ともう一度話せたら、あれもこれも話したいのに・・・」と、残念そうにおっしゃるのだった。

弥生さんも私も「次女」だったので、心情的に理解し合えるところがあった。寅彦先生は高知にお国入りされるときはいつも長女の貞子さんと長男の東一さんだけをお連れになった。弥生さんはかなり大きくなるまで高知に行くことはなく、「みんなの話を聞きながら『おくに』ってどんなにすばらしいところかとずっと思っていたんですよ」とおっしゃるので、「たしかに、次女ってそういうこと多いですよね」と相槌を打ったものである。

そしてようやくお国入りのお供を許されたときは、神戸から乗った船が外海で大揺れに揺れて、上陸してもひどい船酔いで起き上がれず、せっかくの皿鉢料理も全然食べられなかった。それで帰りは弥生さんのために大歩危小歩危を通って陸路高松港に向かったところ、車の運転手さんが眼病で片目に大きな眼帯をしたまま断崖絶壁すれすれに走るので、生きた心地がしなかったそうである。そんな面白い話も、思い出を共有する雪子さんと笑い合って話せたらどんなにか楽しかったにちがいない。

弥生さんの人生は、特に最初の頃は、全集を読んでもわかるように、決して著名な大学教授の令嬢として温室の中で幸せいっぱいに過ごされたものではなかった。父上は（頭の良過ぎる？）弥生さんの結婚を心配しながら亡くなられたが、その後兄上の正二さんの友人の関四郎さんと結婚なさった弥生さんは、４人のご子息を得て、寅彦先生がご覧になったらさぞ安心し喜ばれたと思われるような楽しい家庭を築かれ、ご主人を見送られた後は、母屋を潔くご子息たちに譲ってご自分はお庭先に建てた小さな離れに移り、お一人で暮らしながら、最終的には７人の曾孫に恵まれた幸せな「おひいちゃま」として安らかに旅立たれたのである。

弥生さんや私の母の時代は、今とちがってどんなに優秀な女性でも、社会進出がなかなか望めなかった。男女の立場が均等とは程遠かった。寅彦先生の書かれたものにも、やはりどうしても当時の男性の立場や視点が感じられることがある。けれども、弥生さんはそんな時代の女性の生き方の中で、寅彦先生の精神に沿った生活のパターンを築いてこられ

た。それが、弥生さんの人生の目標であり、お父様の愛情に応えることにほかならなかった。そのためにも、誰よりも熱心に寅彦全集の隅々まで目を通していらっしゃったのだと思う。そこには寅彦の遺児である責任感と同時に、「次女」の知り得なかった父上のことや寺田家の歴史を明らかにしたいお気持ちも感じられた。

もっとも「次女」だったおかげで、寅彦先生最晩年に毎夏過ごされた軽井沢では、妹の雪子さんとともに父上を独占して楽しい数日を送るという、お姉様お兄様方にはなかった幸せな思い出をお持ちになっている。

いずれにしても、随筆「芝刈り」の中で、大好きな父上の傍らで、裁縫用のはさみで芝生をていねいに真四角に刻んでいた幼い日の弥生さんの心は、終生変わることがなかった。

寅彦先生の精神を一言で説明するのはむずかしいけれど、強いて言えば人間を含めた森羅万象への真の愛情と関心だろうか。それは虚飾や無駄なことに一切惑わされることなく人生を真に楽しむ生き方である。

私が弥生さん宅にご案内した、特に若い女性のお客様たちは、皆一様に弥生さんのコンパクトで合理的な暮らしぶりに感心し、憧れた。人生の様々な課題を一通り終えた女性が、手の行き届く縁先の小さなお庭に四季折々の花を咲かせ、趣味のパッチワーク、洋裁、カメラにいそしみながら、社会の動きから目を離すことなく、人との会話を楽しみ、ときに笑い、ときに怒り・・・

世の女性が寅彦を読んで、どのように影響され、それを人生の中でどのように実現して行くか、在りし日の弥生さんの姿は、今の私にとって最高のお手本である。

写真：弥生さんが丹精込めて咲かせた庭の花々

（提供：関直彦様）